いなほ

令和３年８月２１日
令和３年度学校だより NO.19①
夏休み号
加古川市立平荘小学校

ふるさと意識を醸成する教育

子どもたちに、自分が生まれ、育ち、住んでいる所をふるさととして大切に思う気持ちが持てるように、そして、自分が生まれ、育ち、住んでいる地域への愛着や誇りが持てるように、伝統文化・芸能の体験や環境体験学習等を通じて、ふるさと意識を育てています。

平荘小学校　伝統文化の学び『狂言学習発表会』に向けて

４月の着任式で、児童会の代表が、「　ー　平荘小学校では、６年生になると狂言発表会があります。そして、狂言発表会で自分の力を精一杯出し切るために、日々の学習の中で、相手に聞こえる声で意見を言ったり、みんなの前で発表したりして伝える力を伸ばせるように頑張っています。ー」と話してくれたことが、今も心に残っています。

「特色のある学校」として、地域の方々に支えていただきながら、平荘小学校の狂言は２１年目を迎えます。毎年、大蔵流狂言方の山口耕道先生のご指導のもと、子どもたちは貴重な体験をさせていただきます。平成２８年に発足した「平荘狂言教室後援会」の全面的なサポートと平之荘神社のご好意により、毎年３学期には、６年生が学校の代表として能舞台で狂言を演じます。

昨年度は、コロナ禍の中、新型コロナウイルス感染拡大防止においていろいろと感染対策を講じながら、できることを精一杯取り組み、今年度の活動へとつないできました。昨年度の子どもたちのテーマは、『つなぐ』でした。先輩から後輩へと、自分たちが先輩から引き継いできたことを、後輩につなぐという大切な役割を自覚しながら、昨年度の６年生は、２月１８日（木）に「狂言学習総まとめ『有終の会』」を開催しました。

この子どもたちの熱い思いと、地域の方々の温かい支えをしっかり受け止めながら、今年度の６年生も、山口耕道先生の指導のもと、力を発揮してくれることを期待しています。

伝統…「つなぐ」ということ…

「継続は力なり」ということわざがあります。口で言うのは簡単ですが、それを実際に行動し続けるということは本当にエネルギーがいることです。

今年度で、平荘小学校の狂言は２１年目を迎えます。言い換えれば、狂言学習を２１年間も続けられているということです。このことは、狂言を演じた子どもたちだけの力で、今に至ったわけではありません。子どもたちから子どもたちへとつないでいったことはもちろんですが、狂言を演じる子どもたちを支えていった教職員や保護者の存在、地域の方々、平之荘神社の方々、そして、何よりも第１回目から現在までゆるぎなく平荘小学校の子どもたちに情熱を注いで指導してくださった山口耕道先生の存在があったからこそだと実感しています。

平荘小学校の閉校まで今年度を含めて３年ですが、平荘小学校の狂言学習を学校全体でも共有しながら、益々発展できるよう頑張っていきたいと思います。ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

山口耕道先生と打合せをしました

８月６日（金）に、山口耕道先生と平荘狂言教室後援会の会長様と本校の関係職員とで今年度の「狂言学習」について打合せを行いました。今年度は１１月２９日（月）から、山口耕道先生のご指導による練習がスタートします。一人一人の子どもたちが狂言学習を通じて、仲間と協力する楽しさや自分の魅力をさらに発見する機会になればうれしいなと期待しています。そして、６年生の姿を下級生に発信していきたいと考えています。

狂言について《６年生の社会科の教科書より》

室町時代になると、まちや村では、祭りや盆おどりなども各地でさかんに行われるようになりました。村をあげて行う田植えのときに豊作をいのっておどられた田楽や、祭りのときに演じられた猿楽は、やがて、能や狂言として広まっていきました。

狂言は、どこにでもいる人の、だれにでも起こりうる日常のできごとをえがいた笑いの芸術です。しかし、無理に笑わせようとするのではなく、みているうちに自然と笑ってしまうような、なごやかな笑いが狂言の笑いなのです。・・・・・

（「小学社会６：教育出版」より）

山口耕道先生のお話

●狂言は、言葉で伝えるので、どんどん声を出させてほしい。

●狂言は、チームワークが必要。話の流れがあって、自分の場（出番）がある。つながりがある。

●声の大きい小さいではなく、頑張っている姿が大事。頑張っている姿があれば、声が小さくても、観客は見よう聞こうとする。

●狂言には笑いがあるが、笑いが起こるまでにプロセスがある。それまでの過程が大事。

●笑いについて、その子だけが受けるのは違う。それぞれに役割がある。演じている者の心の内が見える。

●教え方もあるが学び方もある。学び方で、意欲や努力、工夫が見られるとうれしい。黙って次の指示を待つタイプ、「これは、どうしたらいいですか」と聞くタイプ…、自分で考えながら、聞いてくれるとうれしい。

大蔵流狂言方の山口耕道先生は、国の文化審議会から重要無形文化財「能楽」保持者として認定されておられます。山口耕道先生は、２０代半ばの頃、私設美術館「丹波古陶館」で働いておられたことがきっかけとなり、春日神社（丹波篠山市黒岡）の能舞台で披露される「篠山春日能」で初めて能楽に出会われたそうです。その後、地元で能楽グループを結成し、大蔵流狂言方の安藤伸元氏に師事。現在は、大蔵流狂言方として全国の能舞台で演じると共に、子どもを対象にした狂言の指導など次世代の育成にも力を入れられています。

山口先生との打合せの中で、骨董品についてのお話も出てきました。たくさんある骨董品の中から、山口先生がどうしても欲しかった骨董品について、教えていただきました。その品物を制作した人との出会いや関わり、その品物との出会い（巡り合わせ、タイミング、感動）等、骨董品のお話をお伺いしながら、個人的には、狂言のお話を聞いているような感じがしました。

骨董品は、昔につくられた品物です。それが現在に伝えられているのです。そこには、その物の魅力があり、その時代その時代を生きた人のその物に対する想いがあるということなのです。その物を大切に思う心が今につながっているということなのです。

見せかけの格好良さではない、本当に大切なもの（心）を、狂言学習をきっかけに、子どもたちが体験できるとうれしいです。

６年生の子どもたちにとっては、ともに頑張る仲間の存在、大切なことを伝えてくださる先生の存在、それを支えてくださる方々の存在などに気付き、感謝の気持ちをもって、６年間の集大成ができることを期待します。